

対話能力育成のためのフレームワーク作成 —英語教育の視点から—

所 属：町田市立忠生中学校
氏 名：窪 田 香
派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：言語能力の育成・文化理解・英語教育

I 研究の目的

今日のようなグローバル社会においては、異なる文化を受容しながら協働する力が不可欠である。そのため
の能力として：

- ア 異文化や異なる文化をもつ人々を受容し、共生
することのできる態度・能力
- イ 自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立
- ウ 自らの考えや意見を自ら発信し、具体的に行動
することのできる態度・能力

を教育活動全般において育成する必要がある。ⁱ

本研究では英語が外国の言葉を扱う教科であること
から、自他の伝統・文化に気づく授業展開やスピーチ
の指導など自らの考えや意見を発信する指導をしやす
い点、また英語が国際的共通語として中心的な役割を
果たし、日本人が国際的なプレゼンスを高めていくた
めにも極めて重要であることからⁱⁱ、英語科における
対話力育成を図るためのフレームワークを提示するこ
とを目的とした。

II 研究の方法

- 1 本研究における対話力の定義
- 2 対話能力育成の視点(「対話力」育成を行う手立て)
- 3 視点を活用した授業
- 4 リソースブック作成

III 研究の結果

1 「対話力」とは

本研究では中学生の発達段階を考慮して対話力を以
下のように定義した。

- ① 信頼関係が構築でき、仲間として関係作りがで
きること。
- ② 対話の相手の立場に立った、人権感覚に優れた
発言、態度ができること。
- ③ 論理的な構成による論旨の明快な文を構成し、
自分の意見を伝えることができること。
- ④ ツールとして英語の4技能(話す・聞く・読む・
書く)を身につけること。

多田(2006)は対話を「言語や非言語により、相手
とコミュニケーションを行い、共有できる価値観や概
念を生み出していく行為」と定義した上で、グローバ

ル社会のような多様な他者との創造的関係を構築する
対話としては共創型の対話が重要であるとしている。

共創型対話とは「多様な他者と理解し合い、良好な
関係をもつことの困難さを実感しつつ、知恵やアイデ
ィア、体験などを出し合うことにより、つながり自体
を良質なものに変換していく対話法である。いわば、
言うべきことはきちんと語る西洋的な対話と、『和』
『相互扶助』を基調とする日本を含む東アジアの対話、
それぞれのよさを融合した方向をめざすもの」とし、
対話の目的の1つに「対話のプロセスを通じて互いの
信頼・親睦を深め、共通の目的に向かってよりよいもの
を生み出す仲間としての関係(創造的関係)を構築し
ていくこと」を挙げている。ⁱⁱⁱ

①は対話において最も根本となる力であり、その力
がなければ国内外を問わず相互理解も学習も深まら
ない。①の力をつけていくためには、相手の話に耳を傾
けること、対話をする際にアイコンタクトに気をつけ
ること、笑顔で話すこと等、対話のルールとも言うべ
き、ノンバーバルな部分を身につけることである。ま
た、自分の気持ちを伝える際に相手を配慮したアサー
ティブな方法があることを知ることも重要である。こ
れらを身につけることを意識した活動を行うことによ
って、クラス内のコミュニケーションが活性化され、
学びも深まると考える。

②は対話する際にどちらが上であるといった差別意
識があっては良質な対話とはならないことを意味する。
差別意識をなくすためには、自分を知り他者を知った
上で、自分の持つ文化を知り、相手の持つ文化を尊重
する姿勢が必要である。違いを否定するのではなく、
文化が異なることを楽しみ、様々な角度からものごと
をとらえることによって、相手がどのように感じるか
想像し、相手の立場に立って対話しようという姿勢が
大切である。尊重されることから生まれる「自分は自
分でよい」と自己を肯定する感情は、対話を良質なも
のへと変化させるはずである。

③は異なる文化背景の人であっても理解が容易な表
現方法で自分の意見を発信する能力をつけることであ
る。筋道を立てた論理的な表現は異なる文化背景の人

にも理解が容易であり、英文を書く際には基礎となる表現方法でもある。理由や結論を先に言い、「なぜならば（理由1）」「それに（理由2）」「また（理由3）」^{iv} というように中学校卒業時点で自分の意見に対して少なくとも3つの理由が言えることを目指したい。自分の論を効果的に展開するためには人の意見を聴くことや、どうしたら相手が自分の意見を理解しやすいか考えて発言するといった対話力①②の力を土台としてなくてはならない。

そして最後に④として国際共通語として英語の運用能力を持つことである。従来から行われている文法ベースで教科書をすすめていくことも大切であるが、既習文法を活用して自分の考えを表現していく機会を設け、対話力③の論理的な表現方法で意見を言う練習を積み重ねていく。日本語と英語の比較から日本語の曖昧性に気づき、「中間日本語」（主語・目的語のはっきり表された英語にしやすい日本語）^vを利用して、英語で表現できる力を身につけさせたい。

2 対話力育成の視点

これらの4つの力を必要とする対話力を中学校の英語教育の中でどのように育成するか考え、以下3つの視点を考えた。

視点1 「小中をつなぐ」
生徒のソーシャルスキル育成（小中連携）

クラス内でのコミュニケーションが安心感の上に行われるよう、特に中学校入学当初に人間関係を構築するためのソーシャルスキルを育てるアクティビティを行う。

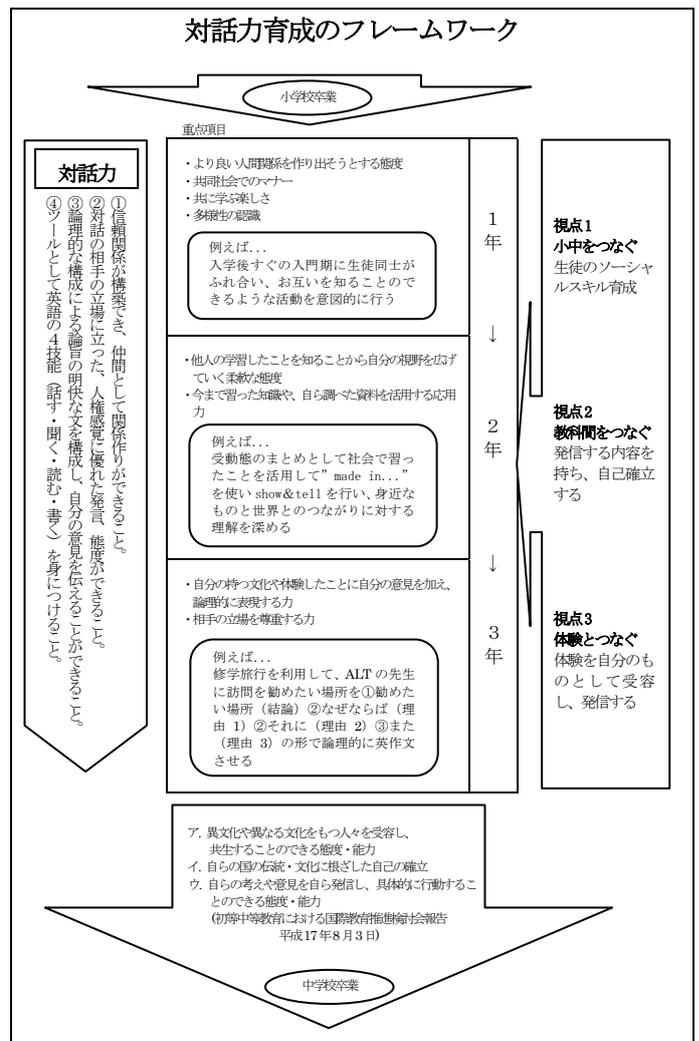
視点2 「教科間をつなぐ」
発信する内容を持ち、自己確立する（教科間連携）

教科間連携の視点である。中学校は教科担任制をとるため、必ずしも同時期に関連した内容が教えられるとは限らないが、極力時期を合わせて、教科を超えた授業を行う。

視点3 「体験とつなぐ」
体験を自分のものとして受容し、発信する（体験活動の活用）

学校行事は学校での学びを充実・発展させる活動であるだけでなく、生徒にとって、身近で興味深く、人に伝えたい題材となる。学校行事を自分の体験として表現させる授業はプレゼンテーション能力を育成する。

以上、1で定義した4つの対話力と2で定めた3つの視点を合わせ、フレームワーク化したものが以下の表である。（具体的なアクティビティ案はリソースブックにまとめられている。）



IV 考察

そのうち、所属中学校において、視点3「体験とつなぐ」を利用し、修学旅行で訪問した場所からALTの先生に勧めたい訪問場所を選び、英作文する授業を行った。

その結果、短期間の取り組みでありながらも生徒に変容が見られ、取り組む価値を見いだすことができた。今後、英語の運用能力を伸ばすことだけでなく、世界と協働していく対話力育成の視点の入った授業を展開していきたい。

ⁱ 『初等中等教育における国際教育推進検討会報告～国際社会を生きる人材を育成するために～』初等中等教育局、平成17年8月

ⁱⁱ 『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』文部科学省、平成15年

ⁱⁱⁱ 多田孝志『対話力を育てる』教育出版、2006年

^{iv} 諸葛正弥『フィンランドメソッド実践テキスト』毎日コミュニケーションズ、2008年、

^v 三森ゆりか『外国語を身につけるための日本語レッスン』白水社、2003年